

『マビノーギ』研究 (7)

—「マクセン・ウレデクの夢」の物語をめぐって—

中野節子

「マクセン・ウレデクの夢」(‘Breuddwyd Macsen Wledig’)は、ウェールズ中世散文物語集『マビノーギ』(Y *Mabinogi*)の第二グループ、「ウェールズの四つの民話」に属する物語として、分類されている。この物語と「スワイズとセヴェレンスの冒険」(‘Cyfranc Lud a Llefelys’)の二つの物語は、「アーサー王物語」の原型と見なされている。「キルーフとオルウェン」(‘Culhwch ac Olwen’)や「ロナブイの夢」(‘Breuddwyd Rhonabwy’)とは異なり、ローマの占領下にあった頃のウェールズと、ノルマンの影響が未だ及ばなかった時代のウェールズの土着文化の模様を伝える民話と考えられている。

「マクセン・ウレデクの夢」のテキストは、三種類残っている。そのうちの二つは、『マビノーギ』物語の、最古の断片とおぼしきものが収められている。ペニアルス写本 (Ms. Peniarth) の中の、IVとXVIである。他の二つのテキストのうち、『ルゲストの赤い本』(Llyfr Coch Herges) 収録の全文と『ゼレルッフの白く本』(Llyfr Gwyn Rhydderch) 収録の一部分は、「ペニアルス写本」IV から取られたと思われる完全なテキストである。しかしながら、「ペニアルス写本」XVI からの採録とおぼしき、『白い本』の一部のテキストは、途中で突然途切れていて、不完全なままに終わっている。なお、「ペニアルス写本」XVI で使われている言葉と IV のそれとの間には

違いがあることから、この二つの写本よりも以前に、別の原本が存在していたことが考えられるのである。

物語は、ローマの皇帝マクセンティウス (Maxentius)、またはマキシムス (Maximus) とブリトン人の娘エレン (Elen)、またはヘレン (Helen) との恋をめぐって、展開されている。マクセンティウスは、スペイン生まれの將軍で、武力を行使して、正統なローマ皇帝グラティアン (Gratian) に戦いを挑み、一旦は勝利して皇帝の地位につくが、間もなく自らも、アクウィリア (Aquileia) の地で滅ぼされてしまったという。エレンという女性は、ブリトン人の伝説中に、しばしば登場する人物であるが、その実像はさだかではない。この二人をめぐってのローマとブリトンの慣習や制度が、ウェールズ文学独特の、夢と現実をなまぜにする語り口の中で処理されて、一つの優れたフィクションになってゆく過程を示す、典型的な作品となっている。

「マクセン・ウレデクの夢」は、見事なバランスをもって構成された物語である。その魅力が最高に発揮されるのは、この物語が口頭で吟じられたときであると考えられる。三回の繰り返しを使いながら、劇的効果を高めるスピードと、素朴なユーモアに溢れる物語が、簡潔で歯切れよく、無駄のないウェールズ語を駆使して語られることなるからである。ローマの地からブリテン島へ、そして川の溪谷を遡って、娘のいる城の中の大広間へと焦点を絞ってくるときの描写の冴え

は、定評のあるところである。

夢のモチーフが、物語の枠組みとして用いられた、ウェールズ最初の文学作品として知られる「ロナブイの夢」と並んで、この物語においても、マクセンの夢の中に現れた光景（ヴィジョン）は、ローマの力をウェールズの美と結びつける大きな役割を担っている。そして、これらの二つの要素が結合することによって生まれる、新しい世界を予兆しているのである。それはまた、物語という虚構の世界が一番明らかに行きうる、未来図（ヴィジョン）でもあるのだろう。

物語の背景になっているのは、主としてローマの近効と、セゴンチウム（Segontium）、またはカエル・セイント（Caer Seint）といつた古代ローマの要塞が残る、ウェールズのカナーヴォン（Caernarfon）の地である。

I

マクセン・ウレデクの夢⁽²⁾

マクセン・ウレデク（Macsen Wledig）は、ローマの皇帝であった。

歴代の皇帝のうちでも、もっとも賢く、もっとも見栄えがよく、皇帝としてはまさにうってつけの男であった。ある日のこと、彼は王侯たちを呼び集め、友人たちに向かって、「明日、狩りに行くかと思う」と言った。翌朝早く、従者たちとともに、ローマの方向へ流れ下って行く川の溪谷へとやってきて、昼頃までそこで狩りを続けたのだった。二三人の冠をいたたく王たちと家臣たちが、マクセンとともにいた。こんなにも長いこと、皇帝が一同と一緒に狩りをしたのは、ただ狩りがおもしろかったためだけでなく、自分がこのような身分の高い者たちを治める、力ある者であるということを示したいと思ったからだ。

一同の頭上高く太陽が輝き、その暑さは耐えがたいものとなった。マクセンは眠くなり、従者たちが、槍の穂先の上に楯をのせて、太陽の熱をさげさせた。頭の下には、黄金の彫り模様を施された楯が敷かれ、このようにして、マクセンは眠りおちていったのだった。

マクセンは一つの夢をみた。夢の中でマクセンは、溪谷を週のぼって川の上流へと向かい、世界一高いと思われるような山へとやってきた。その高いことといたら、まるで天まで届いているかのようだった。山の頂きを越えると、向こう側に広がっている、今までに見たこともないほどに美しく平坦な土地を、旅しているのだということがわかった。大きな幅広い川が、山から海の方へ向って流れているのが見えた。マクセンは、その川に沿って河口へと旅を続けた。こんなふうにして長いこと行くと、見たこともないほどに広い河口へとやってきた。そこには大きな町があり、町の中には大きな城が立っていて、様々な色彩をした高い塔が、城の上にそびえているのが見えた。河口には船隊の姿があり、それは今までに見たこともないほどの大きな船団だった。真ん中に一隻の船があり、それは、他のものに抜きんで大きく、はるかに立派な船だった。水面に出ている船板の一つは金、次は銀でできているのがわかった。船から陸に向かって、セイウチの牙でできた橋がかかり、マクセンはこの橋を渡って、船へ乗り込んでみようと考えた。船は帆をあげ、海から大洋へと走り出ていった。やがてあらゆる島のなかでも、最も美しいと思われる島へ到着し、マクセンは、その島のこちらの岸からあちらの岸まで、くまなく歩いてみることにした。溪谷と斜面と塔のようにそそりたつ岩、今までに目にすることもないうような、鋭くこつこつとした地形の島だった。このとがった土地に對面するかのようにして、海の中にもう一つの島があるのが目に入ってきた。今いるところと向こうの島の間には、森林のように長くのびている山と、海のようにのびている平原があるのが見えた。その地を横切って、一本の川が、山から下って海へと流れているのが目に入ってきた。河口には、見たこともないような大きな城が立っていて、城の門は開け放たれていた。マクセンは、城へとやってきた。城の中には立派な広間があった。広間の屋根は全て金で葺かれており、壁にはいすれ劣らぬ値打ちものの、光輝く石がはめこまれ、広間の戸びらもまた、全て金でできているのだった。広間の中には、黄金の長椅子と銀のテーブルのようなものが置かれていた。長椅子には、二人の赤茶色の髪をした若者が、こちら向きに座り、グウィズブスに興じているのが見えた。グウィズブスの盤は銀の板、置かれた駒は金だった。若者たちの衣装は、漆黒の絹の錦織りで、髪には赤い色の金で

できた王冠が載せられており、その王冠には高価な石とルビーとが交互に埋め込まれていた。足には、コードバンの新革でできた編み上げ長靴をはき、それは赤い色の金でできた留め金でとめられていた。

広間の円柱のところに、一人の白髪の男が、赤い色の金でできた二羽の鷲のシンボルをつけた、象牙の椅子に座っているのが見えた。両腕には金の腕輪をつけ、手に沢山の指輪をはめ、首には黄金のトルクをかけ、金の飾り王冠で髪を整えていた。その様子は、まことに威厳のあるものだった。金の盤とグウィズブスが前に置かれ、手には金の杖と鋭いやすりを持っていた。男はグウィズブスの駒を彫っていると見えた。

男の前の、赤い色の金製の椅子に、一人の娘が座っているのが見えた。その娘の美しさは例えようもなく、最も輝きを増した太陽を見るよりも眩しいと思えるほどだった。白絹の胴着を付け、胸の部分には赤い色の金の留め金かとめられ、金の錦織の外衣を羽織り、それに似たマントを身にまとい、髪には赤い色の金製の飾り王冠を載せていて、それにはルビーと玉石、真珠と高価な石などが交互にはめ込まれていた。赤い色の金でつくられた飾り帯を腰に結び、その姿は、どんな人もかつて目にしたことのないほどに美しいものだった。

娘はマクセンを迎えるために、すぐに金の椅子から立ち上がり、マクセンは、娘の首のまわりに両腕を廻し、二人は金の椅子に腰を下ろした。椅子は娘が一人座っていたときより、少しも狭くなつたとは思われなかった。

皇帝が娘の首に両腕を廻し、頬と頬とを寄せあつて座っていると、犬たちが盛んに手綱を引っ張る音、楯が縁をぶつけあう音、馬たちがいななき足踏みする音などが聞こえ、皇帝は目を覚ましたのだった。目を覚ますやいなや、夢の中で見初めたこの娘のために、もはや自分には、身も心も残っていないように思われた。関節のひとつ、爪の半分すらも残さずに、体全体でこの娘を恋いこがれるようになっていたからだった。そのとき従者の一人が、「殿、食事の時間がもうすでに過ぎています」と声をかけてきた。そこで皇帝は、馬にのり、これ以上沈みこんでいる男はないような有り様で、ローマをめざして帰っていったのだった。

このようにして、一週間が過ぎた。お供の者たちが、金の杯からワイン

やハチミツ酒を飲むために出かけるときも、皇帝は決して一緒に行こうとはしなかった。歌や余興に耳を傾けるために出かけようとしても、決して行って行こうとはせず、ただ眠ってばかりいた。眠ると、しばしば、その夢の中に、恋こがれるあの娘の姿が浮かんできた。目覚めているときは、娘のことを思うあまりに、何一つ手につかない有様だった。というのも、マクセンには、この世界の一体どこに、あの娘がいるのか、皆目見当がつかないからだった。

ある日のこと、一人の侍従が、皇帝に声をかけてきた。この男は侍従であるとともに、ローマの王でもある男だった。

「殿、家臣の者たちがみんな、あなたのことを悪く言っています」

「何故、悪く言っているだ」と皇帝は尋ねた。

「ご主人さまから当然受けることになっている、御指令もお答えも、何一つただけにいますからです」

「そうであったか。それではおまえが行って、ローマの賢人たちを呼び集めて来てはくれぬか。そうしたら、何故私が悲しんでいるのかを、話そうではないか」と皇帝が言った。

そこで、ローマの賢人たちが、皇帝のところに連れてこられたのだった。

「ローマの賢人の方々、私はある夢を見たのだ。その夢の中で一人の娘に会った。その娘のために、体も、心も、魂すらも奪われてしまったのだ」と皇帝は言った。

「殿、あなたさまが、我々に助言をお求めになりました。それ故、助言をさせていただきます。私達のお勧めは、次のようなことでございます。三つの地方に、三年の間、使いの者を出して、あなたさまの夢についての調査をさせるのです。いつの日か、いつの晩、良きおとずれがやってくるかも知れないという、その望みのために、あなたさまは、その間しっかりとなさって、お過ごしになられることでしょう」

そして使者たちが、その年の終わりで世界中を歩き回って、夢にまつわる話を集めてみようとした。けれど一年の終わりに彼らが戻ってきたとき、その口から知りえたことは何一つなく、そのために、皇帝はすっかり落胆して、自分が恋こがれる娘については、もう何も知ることはできない

かもしれないと思うようになった。

すると、あのローマ人の王が、皇帝に言った。

「殿、東であろうと、西であろうと、ご自分が行かれたと思われる方向へ向って、狩りに行かれたらいかでございましょう」

そこで、皇帝は狩りに出かけ、あの川のところでやって来たのだった。

「私が夢の中で、やってきたところは、まさにここなのだ。この川の上流に向かって、西の方へと旅をしたのだ」と皇帝は言った。

そこで、一三人の使者たちが、皇帝の使いとして遣わされることになったのだった。やがて彼らの目の前に、まるで天まで届くかと思われるような高い山が見えてきた。彼らのいでたちは、次のようなものだった。それぞれの者が、ケープの上に帯びをたなびかせていた。これは、使者の印であった。そのため、どんな土地を通っても、彼らに危害を加える者はいなかった。その山を越えようと、広々とした平坦な土地が見え、そこにいくつかの川が流れているのが見えた。

「見てごらん、あれは殿が見たとおっしゃられた土地だ」と彼らは言った。

一行は、何本かの川が、海へ流れ込む一本の大きな川へと、合流するところまで遡って旅を続けた。川の河口には大きな町があり、町の中には大きな城があって、様々な色彩をした高い塔がそびえていた。河口にはまた、見たこともないような大きな船団がいて、その真ん中に一際大きな船の姿があった。

「さあ、もう一度見てごらん。殿がご覧になった夢と同じものだ」と彼らは言った。それから一同は、この大きな船に乗って海へと漕ぎ出し、ブリテンの島へとやって来た。陸の上を進んで旅をして、エレリ (Eborac) にたどりついた。

「もう一度見てごらん。殿がごらんになられたという、あの切りたった山だ」と彼らは言った。それから一同は、モーン (Mon) とアルヴォン (Arton) の地が、同じ様に向かい側に見えるところまでやってきた。

「ごらん、殿が夢の中で見られたという土地だ」と彼らは言った。

それから、アベル・セイント (Aber Seint) が見え、その河口に城が

見えた。すると、城の門が開いているのが目に入って来た。彼らは、城の中へ入って行った。城の中に大広間があるのが見えた。

「ごらん、夢の中で、殿が見られたという大広間だ」

彼らは、大広間へと入って行った。二人の若者が、黄金の長椅子に座って、グウィズブスをしているのが見えた。大円柱の足元には、白髪の男が、象牙の椅子に座って、グウィズブスの駒を削っていた。そして彼らはそこで、赤い色の金製の椅子に座っている、一人の乙女の姿を見つけたのだった。

使者たちは、娘の前にひざまずいた。

「まあ、皆様方。あなたがたが、高貴なお生まれの方々で、使者の印を身に付けていらっしゃることはわかります。でも、どうしてそんなふうに私をおからかいなさるのでしょう」

「からかっているのではありません。ローマの皇帝が、夢の中であなたさまをお見初めになったのです。あなたさまに、身も心も捧げて恋こがれるあまり、何も手につかなくなっておしまいましたのです。私達と一緒にいらっしゃって、ローマの女帝になってくださいませんか。それとも、皇帝ご自身が、ここにいらっしゃって、あなたさまを妻になさった方がよろしいでしょうか。そのどちらかを、お選びください」

「わかりました。皆様方、おっしゃることを疑うつもりも、そのまま鵜呑みにしてしまつてもありません。もし、皇帝の恋している方というのが、この私であるのなら、ご自身でここにいらっしゃって、私を娶っていただきとうございます」

使者の者たちは、おおいそぎで、夜となく昼となく故郷を目指して帰って行った。馬がだめになると、それを捨てて、新しい馬を調達しながら旅を続けた。ローマに到着すると、皇帝に挨拶し、自分たちの功績に対する褒賞を求めたのだった。こうして彼らは、何でも欲しいものを手に入れることができた。

「殿、私達が案内人となって、心からこがれておいでになる、あの方のところへ、あなたさまをお連れいたしました。今やその方の名前も、ご親戚も、ご血統などもよくわかっているのです」と使者たちは言った。

皇帝はすぐに軍勢を率いて出発し、使者たちが案内人となった。一行は海を越え、大洋を渡ってブリテンの島へとやってきて、マノガンの息子ベリ(Beli son of Manogan)とその息子たちを征服し、海へと追い込んでしまった。それから真直ぐに、アルヴォンへと入っていった。そこを見たとき、皇帝は、その地を思い出した。そして、アベル・セイントの城を見るとすぐに、「あれをこらん、私が、恋いこがれるあの娘に会ったのは、あの城なのだ」と言った。彼は、真直ぐに城へ入り、大広間に向かった。そこで、エヴダフの息子のケナン(Cyran son of Eudaf)とガデオン(Gadeon son of Eudaf)の二人が、グウィズブスをしているのが目に入ってきた。カラドクの息子エヴダフ(Eudaf son of Caradawc)が、グウィズブスの駒を削りながら、象牙の椅子に座っているのが見えた。そして皇帝は、夢の中で見たあの娘が、赤い色の金製の椅子に、座っているのを見つけた。「ローマ皇帝の花嫁に、幸あれ」と皇帝は言った。そして、両腕を娘の首に、廻したのだった。こうしてその晩、皇帝は娘と一緒に眠った。

翌朝早く、娘は、自分の処女性に対する褒賞金を支払って欲しいと言った。というのもこの娘が処女であることが、はつきりしたからであった。皇帝は、何なりと望みのものを、挙げてみるがよいと言った。すると彼女は、自分の父のために、北海からアイルランド海に至るブリテン島の土地と、それに付随する三つの島が欲しいと言った。そしてまた、ブリテン島の中の、自分が選ぶ三つの地に、ローマの女帝が支配する三つの要塞を造って欲しい言ったのだった。一番目の要塞は、このアルヴォンの地に建設し、皇帝が、眠ったり、座ったり、歩き回ったりするとき、より健康に過ごせるようにするために、ローマからの土を寄せて欲しいと言った。後になって、彼女のために、二つの砦が建られた。それらこそが、カエール・スイオン(Caer Llioni)とカエール・ウリズイン(Caer Frydydin)である。

ある日のこと、皇帝は、このカエール・ウリズインから狩りにでかけた。ヴレニ・ヴァウル(Y Frenni Fawr)の頂上までやってくると、そこにテントを張ることにした。

この野営の地は、その時から今に至るまで、カダイル・ヴァクセン

(Cathir Fawen)と呼ばれている。一方、カエール・ウリズインの方は、沢山の人の手によって造られたために、こう呼ばれているのである。

後にエレン(Elen)は、ブリテン島を縦断して、一つの砦までを結ぶ公道を、造ろうと思った。そのために、このような道は、「軍勢を率いるエレンの道」と呼ばれている。というのも、彼女はブリテン島の出身で、彼女を除いては誰も、このような立派な道を造る軍隊を、動員できる者はなかったからである。

皇帝は、この島に、七年の間留まった。さて、当時のローマの慣習によると、自分の征服した異国の地に、七年間留まったなら、いかなる皇帝といえども、継続してその地に居らねばならず、ローマに帰ることは許されないことになっていた。そこで人々は、新しい皇帝を、選んだのだった。新皇帝は、マクセンに、次のような威嚇の手紙を、書いてよこした。そこには、「帰れるものなら、帰って来よ」とのみ、したためられていた。その手紙と知らせとが、遙々と、カエール・スイオンのマクセンの元まで届けられた。そこで彼は、自ら皇帝と名乗る、ローマにいるその男へ返事を書いた。そこには、「帰ろうと思えば、帰って来よ」とのみ、したためられてあった。

それからマクセンは、軍勢を伴って、ローマをめざして出発し、フランストとバーガンデイの地、そしてローマに至るまでのあらゆる国を征服し、ローマの町を取り囲んだのだった。

一年の間、皇帝は、町の前に留まった。けれど、最初の日にいたところから、一歩も近くには寄れなかった。後方には、ブリテン島からやってきた、「軍勢を率いるエレン」の兄弟たちが、続いていた。小さな軍団ではあったが、数の上では二倍にもあたるローマの兵士たちよりもずっと優れた戦士たちが、彼らといっしょについて来ていた。自分の軍隊の近くに、この軍団が駐屯していること、それは、今までに見たこともないほど立派な軍隊で、その規模をはるかに優る装備を備え、勇ましい軍旗をたなびかせていることが、皇帝に伝えられた。エレンが出てきてそれを眺め、兄たちの軍旗であることを確認した。それから、エヴダフの息子ケナンとエヴダフの息子ガデオンが皇帝を訪問し、皇帝は快く彼らを迎えて、抱擁を与えたのだった。

その後二人は、ローマの兵士たちが、町を攻撃している様子を観察した。ケナンが弟に言った。

「これよりもずっと上手に、この町を攻める方法を考えてみよう」

二人は夜の間、墨壁の高さ、大工たちを森へやって、兵士たちの四人に一つの割合で、梯子を作らせた。準備が出来上がると、二人の皇帝たちが、毎日昼頃食事を始めること、その間、兵士たちは、両陣営ともに一切戦をしないことなどを、つきとめてきたのだった。一方、ブリテン島からやってきた兵士たちの方は、朝のうちに、食事をすませて、すっかり元気になるまで、盛んに飲んだり食べたりした。こうして二人の皇帝が、食事をしていながら、ブリトン人たちは墨壁に近づいて、梯子をかけた。この様にして彼らは、墨壁を乗り越えてしまったのだった。新皇帝が武器を取る間も与えずに、襲いかかり、皇帝とその側近の者たちを、殺してしまつた。その後、三日三晩かかって、町の中に残っている人達を征服した。全てを掌握してしまふまで、他の者たちが、マクセンの軍隊の兵士の一人といえども、町の中に入れないようにと見張っていた。

そこで、マクセンは、「軍勢を率いるエレン」に言ったのだった。

「何とも不思議なのは、あなたの兄弟たちがこの町を征服したのが、どうも私のためにはない、と思われてしまうことなのだ」

「お殿様、私の兄弟たちは、世にも優れた賢い者たちでございます。それならば、ご自分でお出かけあそばして、この町を譲り渡すように、おっしゃられてはいかがでございます。あの人たちが町を掌握してしまっているのなら、喜んで貴方様に引き渡すはでございます」と彼女は答えた。そこで皇帝は、出かけていって、町を引き渡すようにと、二人に言った。すると彼らは、「この町を征服してマクセンに与える者は、自分たちをおいて他にはなかるう」と答えたのだった。それから、ローマの町の門は開け放たれ、皇帝は王座につき、全てのローマ人たちが、彼に忠誠を誓ったのだった。

それから皇帝は、ケナンとガデオンに言った。

「お二人の方々、これで私は、自分の帝国の全てを手に入れることができた。この軍隊はあなたがたに差し上げることにしてしよう。どこなりと行って、征服なさるがよい」

そこで二人は出立し、領地、城、町などを征服し、男たちは殺し、女たちを生かしておくことにした。こんな風にして戦いに時を費やしているうちに、若者たちの髪も真っ白になってしまっていた。やがてケナンが、ガデオンに言った。

「あなたは、この土地に留まるか、それとも後にしてきた地へ戻るか、どちらを選ぶおつもりだ」

そこでガデオンは、自分の生まれ故郷へ帰ることに決め、多くの人々が、彼と共にそうしたのであった。けれどケナンと他の人々は、この地に住み着くことにした。そして彼らは、女たちの舌を全て切り取ってしまうことにした。自分たちの言葉が壊れてしまうのを恐れたためであった。このように女たちが沈黙し、男たちが喋り続けたため、サダウ (Itydaw) の人々は、ブリトン人 (Britanoid) と呼ばれているのである。そしてそれ以後、この言葉を話す人々が、ブリテン島からやって来るようになり、今でもそれは続いている。

この物語は、「マクセン・ウレデグの夢」と呼ばれている。これでこの話は終わる。

II

この物語の主人公であるマクセン・ウレデグは、ブリテン島に駐屯していたローマの司令官、スペイン生まれのマグヌス・マキシムス (Magnus Maximus) であると、考えられている。六世紀に活躍したブリトン人の修道僧ギルダス (Gildas) は、『ブリテンの記録 (De Excidio Britanniae)』の二三章から一四章に、また九世紀の修道僧ネンニウスは、『ブリトン年代記』(Historia Brittonum) の二七章において、ブリテン島に駐屯していたローマ人司令官マキシムスの経歴について記述している。それによると、この人物は、西暦三八三年に、ブリテン島の最強の部隊を引き連れて、フランスへ侵攻し、弱体となっていた、正統のローマ皇帝グラティアンを倒し、自ら皇帝と名乗ったのであった。こうしてマキシムスは、武力をもって、ゴールの

西の地方とスペインを治める、唯一の支配者になった。しかしながら、五年後の西暦三八八年には、彼自身もまた、テオドシアス (Theodosius) に倒されてしまったというのである。

このマキシムス、すなわち、この物語においてはマクセンという皇帝は、二つの点で、その後、代々のウェールズの人々に、忘れぬ印象を残す人物となったという。一つには、彼のおかげで、ブリテンの地には勇敢な兵士たちがいなくなり、その結果として、ピクト人、スコット人、サクソン人等の、他民族の進入を許す結果を招くことになったということである。二つめに、このマキシムスが、その後のウェールズを治める、初期王朝の始祖となったのだという認識が、生まれたということである。この考えは、共に一二世紀の始め頃、まとめられたと見なされる二つの文献の中に、いっそう明確に示されている。

まず、モンマスのジェフリー (Geoffrey of Monmouth) は、『ブリテン諸王の歴史』(Historia Regum Britanniae) の中で、この皇帝がブリトン人の娘を妻にしたことを述べている。しかしながら、娘の名前は、ただオクタヴィアス (Octavius) の娘と言うだけで、詳しいことは明記されてはいない。一方、この「マクセン・ウレデクの夢」の物語においては、娘の名前は、「エレン・スイダク」(Elen Luydawc)、すなわち、「軍勢を率いるエレン」と明記され、カエル・セイント (II セゴンチウム) を治めるエウダフ (II オクタヴィアス) の娘と記されているのである。このエレンという娘の名前も、マクセンと同様に、もともとは、多分、ウェールズの人々の間に伝わっていた、伝説中の女神の様な存在からきているものであろうことは、容易に察しがつく。そして、この物語において、マクセンとエレンという、歴史と伝説上の二人の人物が、初めて一つに結びつけられているのがわかる。確かなことは、この結合がきわめて人工的なものであり、これら二人の、よく知られているウェールズ伝説中の高貴な始祖たちが、一人の詩人の手によって、夢の枠組みをもった物語の中で、一つにまとめられたということである。そこにはなにか、歴史的必然性といったよう

なものがあったとは考えられないであろうか。

エレン・スイダクはまた、この物語の中では、ウェールズにはしる、ローマ街道と結び付けられて語られている。すなわち、彼女は、ブリテン島に造らせた要塞を、それぞれ結ぶための公道をも造ったというのである。ウェールズの高地から切り出した鉱石の運搬に使用するために、ローマの人々は、真っ直ぐにのびた道路を、カーディガン (Cardiganshire)、カナーヴォン (Carnarfonshire)、メリオネス (Merioneth)、ブリーコン (Breconshire) の各地に残している。

そして、これらの道路は、「ヘレンの道」ウェールズ語で、「Sarn Helen」と呼ばれているのである。この「ヘレンの道」のヘレンというのは、もともとは「肘」とか「角度」を意味するウェールズ語の 'elw' からきていると考えられている。しかしながら、元来このような、直進するローマ道路というのは、ウェールズの地にはなかったのである。したがって、むしろこの名前は、「古ローマ軍団」を意味するウェールズ語の 'Y Lleng' からきたものと考えるのが妥当であるだろう。そのうえ、この名前を、「聖ヘレン」(Saint Helen) と熱心に結びつけようとした、一二世紀から一三世紀の詩人たちの努力も加わって、事態はさらに混乱をきたすことになった。彼らはさかんに、このセゴンチウムのエレンが、「聖ヘレン」と同一人物であると主張した。けれども、もともと、この「聖ヘレン」を、ブリテンの地と結びつけようとする自体に無理があるのである。「聖ヘレン」という人物は、コルチェスターの名祖となつたと考えられているコール王 (King Cole of Colchester) の娘であるとされ、ローマ皇帝コンスタンチウス (Constantius) と結婚して、初代キリスト教徒の皇帝コンスタンチン (Constantine) を生んだとされている。彼女はまた、エルサレムにおいて、真実の十字架を発見した人物であるともいわれているのである。しかしながら、このヘレンは、どう考えてもブリテンの地とは無関係な人物であり、また年代的にみても、一世代前の存在であることは明白である。ただ一つ確かなことは、この「マク

セン・ウレデクの夢」を編集した詩人の手によって、「ヘレン・スイダク」という人物と、広く知られている、伝説上の皇帝マキシムスのブリトン人の花嫁とが、同一人物として、ここに結びつけられたということであろう。

ウェールズの三題歌によると、「エレン・スイダク」(「軍勢を率いるエレン」)とその弟ケナンの軍隊とは、「イルプ・スイダク」(「Tyf Luydawc」)(「軍勢を率いるイルプ」)、ベリの息子カスワッソン(Caswallawn son of Beli)とベリの娘アリアンロト(Arianrhod daughter of Beli)の率いる軍隊と並んで、ブリテン島から出陣してゆき、二度と再び戻ることのなかった三つの軍隊の一つとして、記述されているのである。⁽³⁾

エレンと共に、軍隊を率いてブリテン島をあとにしたこのケナンは、弟ガデオンと協力してローマを攻略した功績によって、皇帝マクセンからローマの軍隊を貸し与えられ、周囲の土地を次々と征服していったという。やがて、ガデオンは、他の人々と共にブリテン島に帰ってゆくが、彼はその地にとどまった。故郷ウェールズの言葉を純粋に保つために、その地の女たちの舌を切り取ってしまったともいわれている。それゆえ、以後ブリタニーの地は、「半分の沈黙」を意味するウェールズ語の「Iedd-law」すなわちサダウ(Llydaw)と呼ばれているのであると物語は語る。しかしまた、モンマスのジェフリーの記述によると、ケナンはオクタヴィアス(すなわちエヴダフ)の甥にあたり、従ってマクセンの妻エレンの従兄弟であるとされているのである。そして、あのアーサー王伝説の主人公アーサー自身も、このブリトン人の血統から生まれたという。ケナンはまた、赤いドラゴンの軍旗をたなびかせ、グウィネズのカドワラドル(Cadwaladr of Gwynedd)と並んで、ウェールズの人々の希望の象徴ともなっている人物でもある。

一方、虚構の世界に属する物語の中では、歴史的事実の因果関係に

は、当然のことながら、歪みが生じている。第一、マクセン自身がローマの皇帝になれたのも、もとはといえば、ブリトンの豪族エヴダフの後押しがあったからのことなのである。すなわち、エヴダフの娘エレインとの結婚という事実が先行して、ローマの皇帝の地位が手にはいつたのであった。それにもかかわらず、物語の中では、マクセンはまず皇帝として登場し、エレンとの結婚は、そのあとの出来事となっているのである。やっとのことで、夢の中で見初めた美しい娘、エレンの居場所を突き止めたマクセンは、使者たちに案内させ、ローマの都から海を越え、大洋を渡ってブリテン島に到着し、マノガンの息子ベリとその息子たちを征服し、海の中へと追い込んだと述べられている。

ネンニウスによると、このマノガンの息子ベリという人物は、ジュリアス・シーザー時代に活躍した、ブリトン人の王であるとされている。したがって、マクセンの時代との直接的関わりは、考え難いのである。この物語の語り手が、マクセンの力を誇示するために、ここに入れ込んだだけだということは確かである。この例からも、人々の間でよく知られている、伝説上の人物や、歴史上の勇者たちを縦横にないませながら、新たな物語を紡ぐ詩人たちの、創作の技術がしのばれる。歴史的事実と伝説の中に生き続ける人々の願望、そして詩人の想像力とが結合して、古きマクセンとエレンの恋の物語に、もう一つ意味が生まれたといってもよい。文学という、言葉の芸術が紡ぎ出した、新しい物語の、真実の誕生である。

エレンの要請にしたがって建てられた二つの砦のうち、カエル・スイオンとは現在のチェスター(Chester)の地、もう一つの砦があったというカエル・ヴリズインとは、「メリズイン(マーリン)の砦」(‘Caer Meryddin (Merlin)’)の意味をもち、数々の伝説がうまれた土地として物語の中に再三登場してくる、現在のカマーザン(Carmarthen)の町である。またアベル・セイントの城とは、カエル・アベル・セイン(Caer Aber Sein)すなわち現在のカナヴァンであると考えられている。

古来ケルト人の社会において、家の血統は、母方の血筋で伝承されてゆくのが常であった。息子よりも、甥の存在が大きな意味をもっていたのである。このことから明らかなように、ケルト社会における女性の地位は、大変高かったといえるだろう。この物語においても、結婚した翌朝に、エレンはマクセンに堂々と自分の処女性に対する褒賞を、要求している。テキストの中で使われている *agweddi*、*ipdddi* という言葉はもともと、一度結びついたカップルが、何らかの理由でうまくゆかなくなったときに、夫から妻に対して支払われる慰謝料を意味していた。その額は、妻の結婚前の社会的地位と、一緒に暮らした期間によって、それぞれに異なっている。すなわち、七年連れ添った後に別れることになったとき、彼女が王の娘であった場合は二四ポンド、貴族の娘の場合は三ポンド、そして農奴の娘の場合は一ポンドが支払われることになっていたという。また、二人の生活が七年以上続いた後別れる場合には、妻は、夫との共同財産の半分にあたる額を要求してきたのである。しかしながらこのテキストの中では、*ipdddi*、*ipdddi*、*ipdddi*、*ipdddi* の意味で使われていることは、明らかである。この *ipdddi*、*ipdddi* の方は、結婚した翌朝に、夫から妻に与えられる贈り物であった。したが、額はずっと少なく、王の娘で八ポンド、貴族で一ポンド、農奴の場合は二四ペンスということになっている。⁽⁴⁾

夢の中で、一目見たときから、マクセンの心を捕らえて放さなかったといわれる美女エレンは、但美しいことだけが取り柄の、人形のような女ではなかった。彼女は自分の係累のために多くの富をもたらし、また、マクセンにとってもそれなりの報いを与えた、幸運の女神でもある。七年の間ローマを留守にしていたため、皇帝の座を奪われそうになり、あわてて帰国した夫マクセンは、ローマの町を前にして、一年の日々を無為に過ごすことになってしまふ。そんなとき、彼を助け、ローマの町を攻略し、再び皇帝の地位につけてくれたのが、

ほかならぬこのエレンの兄弟たち、ケナンとガデオンであったからである。夫と自分の親族の間を取り持つ、エレンの賢明な判断によって、全てはうまく収まったのである。

III

古今東西を問わず、人は至るところで、様々な夢を見てきた。そしてまた、それらの夢をどう考えるかについては、いろいろな人が、様々な見解を述べ続けている。そこには、批判的能力が停止し、現実認識力が極端に衰えている夢の中で、閃光の如く現れるメッセージや意識の支配下にある我々の別の面などを、何とか理解したいものだという、人々の強い欲望があらわれているのである。夢の中では、将来おこるかもしれない事件の前兆や警告、そして多くの寓話がかたられる。古代メソポタミアのギルガメシュの叙事詩に始まって、ギリシアの詩人ホーマーのイリアッドの物語やヘブライ民族の旧約聖書の世界の昔から、沢山の夢の記録がなされ、それらをめぐって様々な解釈がおこなわれているのである。

夢解釈の分野で、最も組織的な理論を提示した哲学者の一人に、西暦二世紀頃に活躍したギリシア人アルテミドラス (Artemidorus) がいる。彼は、夢にはそれぞれに性格を異にする五つの種類があるといっている。それらは、夢、ヴィジョン (幻視)、神託、ファンタジー (幻想)、幻影に分類することができる⁽⁵⁾。また、日本古代の社会においても、夢は神の啓示、神意の現れと考えられていた。国政を決定するにあたっては、天皇たちが、しばしば祈禱、お籠り等の働きかけを積極的に行うことによって、神託、すなわち夢を得るための祭式的行為を司っていたのである。このように、古今東西に渡って、夢は、人間が物事を判断、決断あるいは解決する際に実に重要な意味をもち、現実生活を左右させるほどの力をも有していたことがわかる。しかしながら、時代が移るにしたがって、夢が人間の実生活の中

で占める位置や、それが有する価値、影響力は大きく変化していった。人々の超自然的なものに対する、畏敬の念が薄らいでゆくにつれて、夢はその神性を失い、人間の無意識的なものの表れとして、フロイト流心理学や精神分析の対象として扱われるようになってゆくのである。すなわち、神とか悪魔とかいう、人間の存在を越えた外からの働きかけではなく、人間個人の内面的なものとの関わりから、夢という現象を把握しようという傾向が強くなっていったといえよう。

全体の物語を、夢の枠組みの中で語ってゆくという手法は、アイスランドのロマンスものの大きな特徴の一つであった。同じケルトの民に属し、アイスランドの社会との交流を通して、彼らの文化の影響を強く受けていたウェールズ文学の中で、夢のモチーフが物語の枠組みとして用いられた最初の話は、「ロナウイの夢」であると考えられる⁽⁶⁾。マダウグ(Madawg)とイオルオエルス(Torwoeth)という兄弟の間で行われた争いに巻き込まれ、遠征軍の一兵士としてかり出されたロナウイが、六〇〇年に渡るタイム・スリップをして、夢の中で、サクソン人を相手とするアーサーの、最大にして最後の戦い、六世紀のベイドン(Badon)の戦いを、目撃するという物語である。時間と空間の制約を自由に飛び越えて、詩人の想像力のおもむくままに繰り広げられる語りの中に、事実と虚構とが渾然一体となった物語世界の絢ぎだす、一種の真実がみえかくれし、色彩の競演とが相まって、強烈な印象を残す、ウェールズ散文文学の傑作の一つに数えられている。実像と虚像とがまじりあった、様々な人物の登場といい、ウェールズに古くから伝わる盤上のゲーム、グイスヴィスの果たす役割といい、もう一つの夢物語、この「マクセン・ウレデクの夢」との間には、数々の一致がみられる。文献として書き留められ、保存されるようになったのが、共に一二世紀から一三世紀とみなされているのも、興味深いことであるといえるだろう。

二つの物語とも、夢をみるようになるくだりには、明らかな類似点が見られる。すなわち、ロナウイもマクセンも、何らかの身体的苦痛

の経験の後に、夢の世界に導かれるということである。ロナウイの場合には、事態は一層深刻であった。彼と友人の三人は、汚い家に泊まり、粗末な食事の後、蚤の襲撃にさんざん悩まされたあとで、やっとのことで眠りについたとき、くだんの夢をみることになるのである。他の二人とは違って、何故ロナウイだけが夢をみるようになったのであろうか。そこで出てくるのが、ロナウイが敷いて寝たという、黄色い牛の皮の存在である。一方マクセンの場合は、耐えがたい太陽の熱気という身体的苦痛を味わったのち、金色の楯を枕に眠りについたら夢を見たということになっている。彼らが夢の中で、出会ったものにも、一方は戦争、そして他方は恋といった大きな違いが生まれてきているのがわかる。

「マクセン・ウレデクの夢」は、皇帝マクセンの、夢の中に現れた恋人、エレンを捜す探求の旅の様子が、主なテーマとなった物語である。エレンのいる北ウェールズのカナーヴォンの城への旅は、合計三回行われることになる。一回目は、皇帝マクセン自身が、夢の中でたった一人で行う旅、二回目は、マクセンの命を受けた一三人の使者たちが行う捜索の旅、そして三回目は、エレンを娶るために、軍勢を率いて再びブリテン島へ赴くマクセンの旅である。その模様を伝える詩人の語り口の冴えは、まことに目をみはるものがある。

第一回目、夢の中の旅の描写は、きわめて詳細に行われ、目をつぶると、その様が浮かんでくるような錯覚に陥る。マクセンの歩みを進める土地は、まず世界一高い山から始まり、平野、川、そしてその川の河口へと絞られてゆく。河口には町が、町には城が、そして城の上には高い塔が、彩りも鮮やかにそびえている。河口にはまた、大きな船隊が停泊し、その真ん中の一際立派な船がクローズアップされ、橋を渡って船に乗り込むと、帆をあげ、内海から大洋へと船は進み、ごつごつした地形をもつ島へと到達する。再び目に入ってくる、山、平野、川、そして河口にそびえる大きな城。そしてマクセンは、開いている門から、まるで吸い込まれるように、城の中へ入ってゆく

のである。城の中には、大きな広間があり、ゲームに興じる二人の若者、ゲームで使う駒を削る白髪の男、そして、その男の前に、目映いばかりに美しい一人の娘が座っていたのであった。城の中で見た四人の人々の、華麗な服装も印象的なものである。娘は立ち上がってマクセンに歓迎の挨拶をした。二人が頬を寄せ会い、びったりと抱き合っていて、金の椅子に座ったのもつかの間のこと、突然聞こえてきた争いの喧騒の中で、マクセンの夢は覚めてしまったのであった。こうたどってみても、たまたみかけるように、また同じ言葉を繰り返しつつ、夢の中に提示されたヴィジョン（幻影）を描いてゆく、詩人の筆さばきは見事というほかはない。

続く二回目の旅は、今度は現実の旅であること、マクセンの夢をなぞるようなかたちで行われた、使者たちだけによる、彼を除いての旅であること等、一回目のものと明らかに違ってきている。一三人の使者たちは、「見つじひん」(edweddassant) という言葉を連発しつつ、マクセンが夢の中で見たヴィジョンを、現実の世界で確認してゆくのである。すなわち、この二回目の旅の描写においては、切り立った山は、北ウェールズに実際に存在しているスノードン(Snowdon)の山、そしてまた、一同が到着した土地は、アングルシー(Anglesey)島とアルヴォンの地であった等、具体的な名前が与えられているのである。

さて、三回目の旅は、妻の中で見たヴィジョンを、マクセン自らが現実の世界の中に確認してゆく旅となっている。具体的な地名が提示されているだけでなく、今度は、登場人物それぞれにも、具体的な名前が与えられているのである。そのうえ、ブリテン島に残されている「ローマ街道」についての説明も加えられ、物語に一層の現実性が増しているのがわかる。恋するエレンを見つけただしたマクセンは、夢の中の突然の別れを思い出し、それを恐れるかのように、彼女をその日のうちに妻に迎えるのである。こうしてローマの皇帝マクセンと、ウェールズの族長エウダフの娘エレンは、めでたく結婚し、ローマ帝

国の力とウェールズの美がここに一体となったのであった。

しかしながら、この物語に特徴的なことは、マクセンの恋のテーマがめでたく終わった後に、もう一つの物語がつけ加わっているところであろう。エレンと結婚したローマ皇帝マクセンは、彼女と共に、このブリテンの地に七年の間とどまった。たまりかねたローマの人々は、慣習にしたがって、新しい皇帝を選んだのだった。これは、規則に則った行為であり、マクセンには何ひとつとして、この決定に異議を申し立てる権利はないと思われる。しかし、その知らせを受けるとマクセンは、踵をかえしてローマの都へとつてかえし、今や正当な皇帝となっている男と争おうとするのである。この行為のみをとりあげてみても、はなはだ勝手な行動であるといわねばなるまい。しかも彼は、一年の間、ローマの都の前に陣取っていながら、自分の力では、攻略することもできずにいる。そして結局のところ、ローマの都は、妻エレンの兄弟二人の奇襲作戦によって陥落し、彼らの好意によって、マクセンはやつとのことと都の土を踏むことができたのであった。こうして彼はローマ皇帝の座を確保し、そのみかえりとして、エレンの兄弟の二人に、ヨーロッパ各地を征服する権利が与えられたのだという。とくに兄のケナンはその地にとどまり、ブリタニー地方のブリトン人の祖となったというのである。

歴史上のマグヌス・マキシムスもまた、武力によって、正統なローマ皇帝であったグラティアンを倒し、自ら皇帝と名乗るようになった男であった。この人物を下敷きにして、この物語の詩人が、想像力を駆使して、新しい創作世界を作り上げたときにも、その事実までを、消し去ることはできなかったことがわかるのである。強大な異民族、アングロ・サクソン人が支配する時代が、もうすぐそこまでやってきた。そんな脅威をひしひしと身を感じながら、強大な武力を誇って世界を制覇した、あのローマ皇帝までをも、その美しさと機転をもって意のままに動かしたブリトン人の娘が存在したことを、詩人たちは何とかして伝えたかったのかもしれない。その願いもむなしく、や

がてこの物語の背景となった北ウェールズの地は、一二八四年、エドワード一世率いるイングランド軍に制圧されてしまうのである。その圧倒的な力に抵抗するかのように輝く、この小さな物語の完成された美しさが、人の心を魅了してやまない。

言葉の芸術の世界、文学の中で詩人たちが願ったのは、ペンと想像力による、剣と力への勝利であった。そんな未来を、ウェールズの物語の語り手と聞き手たちは、一つの物語世界を共有するとき、共に夢みていたであろう。

注

- (1) 本稿は、拙論『マビノーギ』研究(1)―(6) (山梨英和短期大学、「紀要」第19号―24号、一九八五―一九九〇年)に続くものである。
- (2) 使用テキストは、主としてウェールズ語版、J. Gwenogvryn Evans (ed.): *The White Book Mabnigion* (Pwllheli: Private Press, 1907), John Rhys & J. Gwenogvryn Evans (eds.): *The Text of the Mabnigion and Other Welsh Tales from the Red Book of Hergest* (Oxford: Clarendon Press, 1887). 英語版、Gwyn Jones & Thomas Jones (trans.): *The Mabnigion* (London: J. J. M. Dent & Sons Ltd, 1949) 244p。
- (3) Rachel Bromwich (ed.): *Triodd Ynys Prydain: The Welsh Triads* (Cardiff: University of Wales Press, 1978), pp. 75-84.
- (4) Dafydd Jenkins: 'Property Interests in the Welsh Law of Women' (Dafydd Jenkins & Morfydd E. Owen(eds.): *The Welsh Law of Women* (Cardiff: University of Wales Press, 1980)) 参照。
- (5) Erich Fromm: *The Forgotten Language. An Introduction to the Understanding of Dreams, Fairy Tales and Myths* (New York: Grove Press Inc., 1951), Chapter V 'The History of Dream Interpretation' 参照。
- (6) 拙論『マビノーギ』研究(6)―「ロナンイの夢」の物語をめぐって― (山梨英和短期大学、「紀要」第24号、一九九〇年) 参照。